

海外で教える先生たち 在外教育施設事情

全国公立学校教頭会顧問会 元会長
香港日本人学校大埔校J S 校長



渡辺 真也

はじめに

在外教育施設とは、海外にある日本人学校と補習授業校、私立在外教育施設を指します。日本人学校は現在四十九か国に九十四校、補習授業校は五十一か国に約二百三十校、私立在外教育施設は五か国に七校あります。日本人学校は外国で生活する日本人の子どもに対して、国内と同等の水準の教育を行う施設です。したがって、文部科学省は国内の教師を派遣しています。補習授業校は現地校やインターナショナルスクールに通っている日本人の子どもに、土曜日だけ授業を行う学校です。週一日なので、主に国語と算数を学習する学校が多いようです。在籍数が百名を超えると、日本から一人の教師が派遣されます。担任教師を務める人は現地採用の人たちです。

派遣教員の使命は外国に住む日本人の子どもの学力保障と国際性を培うことです。言語や生活様式、風俗習慣の異なった文化を受け入れる懐の広さが必要です。それは派遣された国のことだけではなく、学校内の異文化も同様です。他県からの派遣教員の考え方の違いにカルチャーショックを受ける教員もいます。そんな異文化の中でも、他と協調しながら忍耐強く職責を果たすことが教員に求められています。

香港日本人学校

香港日本人学校は三つの学校からできています。香港校と大埔校のJ S (Japanese Section) とI S (International Section) の二つです。三つの学校を統括しているのは香港日本人学校経営理事会なので、いわば私立の学校です。文部科学省派遣教員は、校長二名、教頭三名、教諭二十九名です。学校で独自に採用している教員は、校長一名の他六十七名、現地採用のスタッフ十六名です。児童生徒数は三つの学校合わせて約六百名ほどです。2019年の民主化運動や2020年からのコロナ対策等で児童生徒数はこの四年

間で激減しました。

学校採用教員や現地スタッフの給料は児童生徒の授業料で賄われているため、児童生徒数の減少は学校の存続に関わる大きな問題です。現

在香港はコロナの制限が完全に撤廃され、児童生徒数も少しずつ元に戻りつつあります。

大埔校I S (International Section) にはいろいろな国籍の子どもたち百七十名が通っています。バカロレアの教育課程に沿って英語で授業を行っています。同じ校舎の中に二つの違った教育課程の学校が共存しているのはとてもユニークです。教員は校長も含めすべて現地採用です。

香港で生活している日本人学齢児童生徒の全てが日本人学校に通っているわけではありません。現地校やインターナショナルスクールに通っている児童生徒もかなりいます。これは保護者の考え方なのでどうすることもできません。高校、大学をそのまま海外で進学させるなら良いのですが、いずれ日本に帰ることが決まっている場合は、帰国後の子どもたちがどれだけ日本で苦勞するか分かっているのか心配になります。

大埔校J Sの先生たち

大埔校J Sは文科省派遣の校長一名、教頭一名、教諭一〇名と学校採用の日本人教諭六名、英国人等の英語教師五名、英国人の図画工作専科一名がいます。また、通年で実施している水泳授業専門の現地インストラクターが五名います。いじめや不登校、生徒指導上の対応は国内と同様です。児童の下校後は教材研究や授業の準備などに一生懸命取り組んでいます。また、新しい教材開発のために校外学習の実踏調査に行ったり、校内研修を行ったりしています。香港校小学部とは年間数回合同の研修会を実施しています。今年度から夫婦派遣が二組あり、それぞれ香港校と大埔校に在籍しています。





ヤクルト工場の見学



英語の先生たち（ハローウィン）

大埔校J.Sの子どもたち

先生方の生活は決して楽とは言えません。香港の物価は高く、生活費にかかるお金は世界の駐在員ランキングによるとニューヨークに次いで二位だそうです。住居はタワーマンション暮らしです。香港は土地が狭いため家賃は世界一高いそうです。最近の円安傾向がさらに教員の生活を苦しめています。

それでも休日になれば香港の食文化を楽しむに出かけたり、トレッキングをしたりとそれぞれ充実した異文化体験の時間を過ごしています。グローバルな視野を身に付けた教師が、帰国後それぞれの都道府県でさらに活躍してくれるだろうと期待しています。

大埔校J.Sは小学部だけです。一年生から六年生まで十二学級があります。2018年は四百五十名いた児童数は五年間で約三分の一まで減少しましたが、今後増加に転ずる見込みです。

日本国内と同じ教科書を使っていて教育課程は日本の学習指導要領に沿っています。理科や社会は香港に合わせて一部変更してあります。

英語は一年生から六年生まで毎日一時間あります。週五時間、能力別の少人数指導を英人等の先生方が指導します。使っている教科書はオックスフォード社の物です。香港はイギリス領だったこともあり、公用語は広東語と英語です。子どもたちの英語のスキルはかなり高く、英検は二級を受験する人がたくさんいます。校外学習で工場見学に出かけた時は、英語で説明を聞いてもらっていると驚きます。日本から来たばかり

の担任の先生に日本語で通訳してくれる児童もいて面白いです。図画工作は英国人の先生が英語で授業を行うイマージョン教育を実施しています。水泳も英語で現地の専門家が指導しています。

通学はほとんどの児童がスクールバスを利用しています。八時前にバスは到着し、午後三時十五分に全員が一斉下校します。給食はないので、毎日保護者の作ったお弁当を持参しています。保護者は学校に大変協力的で、保護者ボランティアを組織し、校外学習の引率補助や通訳ボランティア、図書館の整備や読み聞かせボランティア、校舎内の掲示物を季節に合わせて変えてくれるデコレーションボランティアなどがあります。

交流活動も大変盛んです。同じ校舎を共有しているI.Sの子どもたちとの交流、香港校の小学部との合同行事だけでなく、学校の隣にあるインターナショナルスクールや現地の学校とも長年継続して交流しています。また、国内に原籍校のある派遣教員は、自分の学年の児童と原籍校の児童との交流を始めました。いろいろな地域に住んでいる様々な子どもたちと交流することで、お互いに刺激を受け合っています。

学力は大変高く、話すこともとても大人びています。現学年より一〜二年上の学年の子どもたちと話している印象があります。この子どもたちも将来の日本や世界で活躍する日本人になることは間違いありません。

おわりに

在外教育施設における教育の振興に関する法律（令和4年6月17日）が公布、施行されました。これは在外教育施設にはとても大きな出来事です。在外教育施設の教職員の確保や教育環境の改善が日本の法律で認められていることは、在外教育施設で働く私たちの苦難や困難を少しでも和らげてくれるだろうと期待しています。日本国内でも教員の確保が難しくなってきたりしているのが分かりますが、在外教育施設を後回しにされてしまうのはとても困るのです。在外教育施設で仕事がしてみたい、と思う国内の先生がもっとも増えることを願っています。



現地校との交流活動 協働課題解決